成田山開帳奉額句合

催　額面八清一名一句ツヽ仕ㇾ

根之本　撰

天　九々堂代女　地　豊月庵　人　ゝ一甫

嵩丞　森也　一照　雪笻　随一　棋庵　各十八吽

田歌　柳雨　梅堂　春松　玄清

再考十印

出行の日せつなさくゝ角力取　北支社
ふ方社法や手軽き年の暮ゝ
踊ら行ぬ仕く押合て踊りけり
年の暮折のひそりかりも夜風ゝ
うき世哉八幡の中さよ藤の花ゝ
涼しさや何すかする舟の月ゝ
学寮の目覚しき木蓮哉ゝ
浮名ほと清ひときえてやも乞香　本坊
吹上る桜やさきよし梅若み
碁石すゝけて蛟の涼の雨さ夜哉ゝ
椎竹へ蛍集めて帰り哉ゝ
山ら折てから小八蛟まさされけりゝ
飛ぶ鳥や秋風吹かれ涼しさゝ
出たや清きまての汀の春の水ゝ
去を待ち年念仏し旅の空　ホサノタ
衣染のかくゝ寺にや春の香
蛍枝ゝ照八宮の川し春の水　素菊
蛟所やい咲く川手小雨けり　小田原
若く気ゝは柳の雲の奥ゝ　テツホウス
所ゝふる日和ゝ夕り稲の音さ　中ハし
梅の花行の汁浮る宿まで元日　三十日ホリ
去る日の江戸や鹿むの中の絵小舟　キク
口かな々まま暑く若く梅さ咲　英
幕ゝ敷を見てうゝ去や燈の宿　カヤハ丁
僻ゝの雨さ去る去る葉ゝかゝ
せゝきに茄鴨帰り夕り柳　山

友吟
森凡
里紅
森古
虎ろ
虎樵
宮節
笑梅
雪女
古素
芳山
竹代め
笑口
桂菊
一照
飲風
新種
和来
之笑
閑一
春華
棋庭
典月庵
雪悉
古支
来儀

夜の秋や振まも出さる水の味　桜川
仲ゝしらいやまろき福寿草　芝
山寺に人声もなき四月かな　本ハシ
春の夕女一声ハ綿をとりて　鎌
出生も寺に帰りて菊が香　尾川
麗さ子寄心待つよき小船の桜　吉梅
姿つくつゝ六月八の流れ紫苑　京ハシ
中くもる誓ハ六の塔も薬　八笑
来枯や薄き出でも行寺　麹町
月の影をさしおくりて　羽玄
出て申来る人や秋と来て　行徒
節やさく人なつて其のや飛月
生涼昔の思ひ雅の着は子なり
十分ハ寄行る物よ萩の花
涼しさや桃子ゆき麗の声
子の沖伴ふくや春の雨　春日
時雨帰りや定まるのゆけく月　カナ川
さとの秋も来る夕ハ来て夜の分り　濱
牛の牛鳴るれの名てお宗太の森　小之

常桂　子則　芝江　霞英　升枝　霞水　四寛　机甫　宇静　柳霞　柏句　香堂　市松　玄民　古清　波交　春水　連英　桂笑　里林松

琴麗社評

天十九、京方　地卅　菫洲　人ロ　不雲

当所　茶好　庭署　百成　痕蝶　霞峯
八茶丸　古喜　梨園　芳山　桃水　十九ヨリ十五マデ佳吹

再考十句

沢も児子折通り番扇かれ　キハ
秋も好や其ゐ限りの古き古哭
水合月やさる吹ゝの麗の声　ヨシ丁
一木の寄暮て森茂る茂の葉かれ　松風
一寿きり水の上まも行きこの柳　桜川
生清や上発えて来る田植唄　ミキシヤ
去まも友もさらさや桃の花

芳　玉　京　菫　松　桃　空
山　樹　方　洲　務　秀

定まる所も行くや夕まおまり　鎌
律寂の庭の鶯ハ出てり五月署　米川
芳所て納まさくもし水深の日かれ
其荒も開き行ゝに日の立師走かな　下サ如典
芳出す茶ひ廣けさ庭茶のこの柳　中ハシ
芳子や源んとも好ハ本好ゝ家　京ハシ
秦の秋や家へゝよも吹ゝ　カサイ

庭　枝　月　風　宗　不　痕
署　月　成　枝　英　雲　蝶

芳霞堂評

天十九、庭署　地十六、京方　人卅　好山

当所　桃影　和雀　采耕　豊月庵　棋林
田鼠　素章　嵐猪　菊丸　不萬　十六ヨリ十五マデ佳吹

再考十句

性く往んと離て行る稿や夷の句　キハ
山寺の秋照て房の中らくゝの朱　中ハシ
琴子まけて坂の路ゝの中く井子なり　辛百坂
将ゐまり我も芝ゝの行ゆかり大鐘
涼しさを盆子好せる身かり
桃るら稿子出夢の冬水まのゆり　ハイホリ
往安し着の葉て紙も風亥古襖
薮の中や籠め月る好枝の一ツ　ヨシ丁
時ハ一木の寒扇るのまり坂しぶ
まらく一夜子向けり番植量　北支社
柿らりや自ゝの上ゝも月いゝ　
北の子中も付まゝの梨の声く
被も友まりて盆子の茂りゝの句　カヤハ丁
以ゝらに返りて房の子世ゝの秋　ぬくく
笑ゝり梨ゝ橋本まんゝま蕉所子　稿子
法士ゝの子や月松も金かまで夢の　桜川
住吉の松るゝゝら白今もゝの桜
葛ゑの子をさりて又来りける虫
梅咲ても法く立ゝる鉢の橋　
文行る中氷柱のものゝしゝの　布鳥

笑　古　空　如　芳　薪　素　英　嵐　京　好　出　霞　霞　こ　友　静　松　桃　五　笑
月　葉　菊　章　鳥　勝　山　扇　芝　の　霞　川　雨　錦　彩　別　秀
风

かゝる

荊芽のころ盛まに光る紫のかな　キハ　錦

楚ちや御利益も見へし田の青み　石川

匡大きに斗り揃ふる身も人の流こく　フ書　梅

末枯や懐手をおけ人出の音　京ハシ

粉吹く力このくて知らる法の風　大ツカ

年々に来け人の音にも名の月又　羽衣

時帰りや垣にも老ぬ竹梅売ゝ

梅主法おとくりの冬て菫　下キハ

陽炎やぬれて八軽く沖の石　トサ

珠数をとる行手に拾ふ落穂かな　八笑

葉巾手にとの田面や松枝の音　芦蕉

女郎花露ひらつ重き月かな　寿店

桜木も梵八躰しき以待りられ　イセサキ

秋新や門寄の春さへつらさ蔓　初声

桜て出でゝ手まて踊りの手き伝ふ　吉原谷

大庭を掃く出てるしけ里られ　浦契

菊丸　庭雀　和嶺　松露　宰柳　柳宗　葉松　桜好　鬼水　雪舟　如香　宋川　由葉　柳喜　岱下　鶯一の　丸

○

嫁すき寄る子手に何てうめく扱寄れ
この冬の月ハ屋の彼の宿の花
逃来ぬ錦やし桜のもちてまさ
花菊ももうそろや雨行の月
人住ぬ山新ハ朽しも雲り
白く水しと思ふ手枝も人通り
人もを我が花々家もゝのうひ内　僅

露　森　友　里　去陸　一孝
道　吟　紅　宋　重　富

○

薦つらいぬ柿松もみうや昔の声　主

○

暮の二葉も大勢の別まうれ　磨裡　炸丸

杜若親ぬ人も池の垣　芳霞堂　笑山

出懐さ庵で　水けうけ風の薫る　葉舘社　露竹

根ゝ木　露谷

早稲田文庫

特別
ヘ5
66.51
4
早稲田大学図書館

溜り植吉字安へ掛画る